論 説

人文地理學への歩み

一方法論とその実践への結合の提唱

小 田 内 通 敏

I. 『農業本論』による啓蒙

ふるいことではあるが、明治30年代の初期の地理学の知識は、素朴な「地誌」の羅列に過ぎなかつたから、日本の自然現象や人文現象の特質とそれらに基いている生活様式の現実を解明するまでに進んでいなかつた。故に北は北海道から南は九州に亘る、広域に立地している各郷土の風土と生活を体験して来ている学生（早稲田中学校）たちに、地理学的理法を納得させる智識を与えることは、殆ど困難であつた。

かくて、地理学の研究方法を他の科学に求めなければならなかつた私にとつて、新渡戸稻造先生の『農業本論』（明治31年9月刊）を明治32年に読み得たことは、全く暗夜に燈であつた。本書は単なる農業書ではなく、「農政の序論」として書かれたものであるだけに視野は広がつた。のみならず、同博士が農事に志したのは、旧南部領の三本木の原野を拓いた祖父伝氏や、父上や二兄の遺志を継ぐことに基いているからすべて実践的である。その上、札幌農学校（北海道大学の前身）を始め、欧米の大学に留学された後に書かれたものなので、教養は広くして深かつたから、分析と共に総合的な見方が随処にあらはれていた。従つて、総合的な地理学的研究方法の探究には、非常によい示唆を与えてくれた。殊に博士の長い思索の上に二三大家の説を参照し、以て農学総体の材料と経済に関する学術と万有に関する学理を総攬し得るよう工夫された「表」即ち「農」に関する諸現象と、これに立脚している「農学」の範囲を示されていることは、当時の箇別的な事

象の説明に終始していた地理書の弊に食傷していた私たちに取つては、この上ない啓蒙であつた。この表はまず農を自然と人に大別し、自然を有機と無機に、次いで有機を動物と植物に、無機を大空と土地に分けている。人は団体と個人に、次いで団体を国家と地方に、個人を徳義と営利に分けた。更に動物と植物とを生物に、また国家と地方とを社会に結びつけて、生物と社会を対比させて体系づけ、それらを実践的に考察するために、生物に関するものを生産学で、大空と土地に関するものを理化学と博物学で、国家と地方に関するものを農政学で、徳義に関するものを修身学で、営利を農業経済でまとめるようにし、それらを総括して、生産学と理化学と博物学とは、博物的芸術・実形学・技芸に、農政学と修身学、農業経済とは経済的虚形学に所屬せしめ、最後にそれら全体を「農学」の領域に属していることを明かにしている。中にも生物と社会を抽出されてあることは、われらに人文地理思想の根幹を把握さす大きな契機となつたことは、今でも忘れがたい学恩である。

「農業の分類」において、チューネンの『孤立国』を紹介し、「農業と人口」において、村落の沿革・疎居の村落と密居の村落・疎居の不利なること・都会の起源・都会増進の趨勢・都会増進の理由・本邦人口の集落などに触れ、更に「農業と国民の衛生」において、都鄙の諸問題を取扱つている。これは当時の羅列的な地誌に比ぶれば、非常に体系的であつたから、私がはやく聚落地理・農業地理・人口などの考察に関心をもつに至つたのは、全く『農業本論』を読み、それが機縁となつて新渡戸先生の学風に触れ、また農学という総合的な学問を通じて、羅列的な地理的事象を人文地理学的に考察する志向を納得するようになった。後年「地理的環境としての土地」を土壤の史的また科学的意義から、風土と農業類型との関係、肥料製造工業の進展、ブラージュの土壤の人文地理学的意義、またベロックの道路と土壤との関係などを比較して考えるようになったのも、この考え方に基いている。(拙著『郷土地理研究』「地理的環境としての土地」参照)

Ⅱ. 郷土の総合的研究法の擴充

明治43年8月、真夏の風の烈しい広島に、中目覚高師教授の地理学の講習を受けるにいたつたのは、同教授がドイツ文学を専攻されたのにも拘わらず、地理学に転向され、しかもヨーロッパ留学を終へての直後であつたから、東京高師の山崎直方教授の講習に比べて、きっと特色があるだろうと思ひ、非常な期待をもつて出かけていつたのであつた。しかるに、それが型のようなものであつたのに失望し、帰京に先ち、一夕、同教授を自宅に訪れ、卒直に所感を述べたら、黙つて書齋に入り、大きなドイツ語の本を手にながら坐つて、左の如くいわれた。

君の考えている^{ハイマートランド}郷土学は、ドイツでは、このように発達している。しかし、高師の地理学の講習となれば、東京と同じようなことをしなければならないからなあ……。

私は、中目教授のこの答を聴いて豁然とした。どうしたら、この機運を日本に促進することが出来るだろうか。学界にも教育界にもこの総合的な郷土科学を培養するには、関係諸学を総合するだけの智識と体験をもつておられる人でなければならない。……かくて新渡戸先生に御願してその快諾を得て柳田国男君と共に、毎月、食事を共にする例会によつて、先生を中心とする関係諸学者を網羅した郷土会を開くことにした。

先生の初会での言葉に、

今から30年前に、『農業本論』を著わした時、「郷土」という言葉が、学問の対象として行われていなかったから、昔から伝わつて来た「^{デガタ}地方」という文字を郷土の意味に用いたのであつた。この会に望みたいことは、郷土の地理的觀察は勿論のこと、歴史の研究、現代社会的の調査、殊に経済即ち生活及び物産等に関する考察である。

といわれた。それから前後20年間、専門を異にする会員たちは、相互の立場を尊重しながら、鄉村問題の研究に協力して来た。

かくて大正7年8月、初めて神奈川縣津久井郡内郷村の協同調査を行つた。

沿 革	*柳 田 国 男	天 然 と 土 地	*草 野 俊 助 *正 木 助 次 郎
農業その 他の生業	石 黒 忠 篤 小 平 権 一	衣 食 住	*小 田 内 通 敏
社会生活	小 野 武 夫	教化及び衛生	*牧 口 常 三 郎 中 桐 確 太 郎
俗 伝	中 山 太 郎	蚕 室	田 中 信 良
建 築	*佐 藤 功 一 *今 和 次 郎	*調 査 実 行 者	

与瀬駅に着いて、村長や校長を始め村の有志に迎えられつゝ桑畑の間を南に下り、流迅い桂川に架つた釣橋の上に立つた時、一行の人たちの顔は、何れも包みきれぬ喜と希望で輝いていた。

宿泊所は内郷村阿津の正覚寺、「会の山」の北麓に南面して建つたこの寺は、西から東に流れる小さい阿津川を隔てゝ村内一の誇となつている石老山と相対し、山麓から河岸に発達している台地の上に立つていて、この村の景観を展望し得る位置にある。

柳田君は寺の過去帳を一々穿鑿しては、現住民は何時頃から住み始めたかを立証するのに苦心されて、内郷村中で、道志部落が最も古く開けたことや、明治初年までは、生活の程度が低かつたことを明かにされ、殊に内郷村のような山麓の要害地帯ともいふべき地区は、戦国時代には重要視されて、常に争奪地点となつた日本の地形と軍事的關係を明かにされた。草野君は専門の植物学の見地から、樟の生育程度が農科大学構内のものに等しい所から、内郷村の風土が武蔵野のそれに近いことを断ぜられ、またアラカンが正覚寺のそばの旧道に生長していることと、冬でも綿入がいらないことを対照して、山間ながら比較的温かなことを立証された。正木君は七部落の境と地形の關係を明かにされ、なお阿津川の水路がもと桂川の流路でなかつたらうかと地形上の問題を提出された。中村留次君はあとで来られて三・四日間調べられたが、家の間取の大きいこと、地形の關係上、畑が200町歩あるのに水田が僅かに18町歩に過ぎないから、食糧は村の全収穫を以てしても、8ヶ月を支うるに足らないこと、また養蚕の著しく行われたことは、旧幕時代の記録に、紬が織られていたと書いてあることか

ら立証された。石黒君は養蚕の盛んでなかつた時代には、生活が困難で炭焼や牧畜や山仕事が多かつたろうといわれた。次いで、牧口君は古道の分布や現在の道路を、自分は衣・食・住殊に養蚕による家構と食物の変遷を調査し、佐藤・今岡君は、比較研究資料として、農家の宅地や間取を克明にスケッチされた。以上の調査は、8月15日—25日まで10日間を費し、夜はまた各自の臨地調査のディスカッションが行われた。……

植物とか、地理とか、農業経済とか、建築とか、自然科学乃至社会科学の諸学者が、「郷村研究」のために10年近くも協同研究の経験を積み、始めて10日間も研究を共にした内郷村の研究記録が、世に出づるに至らなかつたことは、私たち協同研究者の不幸であつたばかりでなく、この種の総合的な研究方法を人文地理学界に導入する機会を逸したことは、この上もない恨事でその弊がなほ今日に及んでいる。

今日、私たちの関係してる地理学会の大会において行われる多くの研究報告は、少数の人たちだけは、年々、同質の研究報告を継続されるが、個別的な研究報告が多く、殆んど関係諸科学者の協同研究を見ないのは、所属学会の関係から来る慣例によることであろうが、地理学の如き総合的な学問においては、襟度を開いて、新に協同研究の慣例を開くことは、地理学自体のため又は勿論広く学問の進歩のためにもこの革新を計る途ではあるまいか。竊かに思うに、京都大学の人文地理学講座は、已に明治40年に置かれ、それが小川・石橋両博士によつて分担され、その環境もまた斯学の育成に適している。即ち関西から瀬戸内海を経て、更に九州を含む広い社会文化圏は、京都大学を中枢とするよい学的土壌を形成している。故に織田・藤岡の2教授は、立命館大学を始め、人文地理学会の諸氏と共に、地域組織的にこの人文地理学徒並に関係諸科学者を動員する新しい意図に基く研究機構を創設されて、その運営に努むるならば、それが日本の人文地理学を育成する上に、新しい母胎となることは火を見るよりも明か

である。それには、従来のような人文地理学的研究を遂行するばかりではなく、郷土会で行つたような協同研究を特定地域で遂行することが最も肝要である。協同研究者については、同大学理学部の今西錦司博士の如きその適任者であろうし、その他社会科学者においても、京大教授その他から必ず見出されると思われる。

Ⅱ. 人文地理學と人類生活向上との關係

小川博士は、人文地理学上、一家言をもつておられたことは、その諸論考に明かであるが、われわれの最も関心をもつことは、同博士が、昭和5年10月刊の地学雑誌第500号に寄せられた論稿（「地学雑誌創刊以来42年間の本邦地学界の回顧と前途の希望」）で、その中で、人文地理学が、自然地理学のそれに比しておくらせている結果、停滯状態を來たしていることは満足すべきでない」として「この方面の研究に無關心なる態度を執らんとするものが我が同学の人士中にありとすれば、科学的地理学の最も重要な半面を忘却するの不当を難詰されるべきである」と切言されている。続いて同博士が「地質調査所存在中11年間に亘り、その間常に地質学方面の材料が相当豊富なるに反して、地理学方面の論文が思うように得られないという欠陥を感じた。幸に田中子爵がこの方面の資料を供給されて、地学協会の体面を糊塗し得たとはいえ、遺憾なる点がここにあつた。自分の地理学方面に指を染めるに至つた動機は實にこの必要から來たものである」と述懐されている。その後20年を経た今日、復刊後の地学雑誌を繙くと、その面目を一新して來たが、小川博士をしてこれを見せしめたならば、學問に対して直往邁進する同博士は、もつと人文地理学的になることを要請されるに違ない。なお、前稿の中に述べてある苦惱、則ち――

人文方面に注意し始めて以来、常に懷抱する疑惑疑問は、或る環境における人類生活の向上が如何なる手續によつて行われるかということである。

地質の現形を確める為には、その変遷の歴史が地史学的に正確なるを要

すると同じく、この問題には歴史的の研究が必要であつて、しかも我々を満足させるような歴史の材料を、われわれ自から捜査するという困難に当面してしまふ。この困難を突破するには、まず歴史地理学的方法を創立してかかる外はないのであるといはれる。しかも今日の国情は、この解決は勿論、その要望する歴史地理学的方法以上に、日本の人文地理学をより現実的な方面にまで躍進せしめ得る環境になつてゐる。更に具体的にいえば、今日、安本の天然資源調査事務局で遂行しておられる水部会・土地部会・エネルギー部会・地下部会・衛生部会・地域計画部会・繊維部会・防災部会等の機能は着々調査研究の成果を委員組織によつて挙げつゝ、期待をかけつゝある。故に日本の人文地理学の将来は、一面には人文科学的にまた一面には社会科学的に進展するような企画が積極的に遂行されなければならず、それにはこの際、東京地学協会を始め、日本地理学会・人文地理学会・東北地理学会・日本地理教育学会・などが今までの研究態度を省察しつゝ、新に市民生活に寄与するような重要問題をも討議される日の遠くないことが期待される。日本の人文地理学もこのように成長すれば、総合科学としての域に達するであろうし、それには、各地理学会の連合会が同一問題を予め研究し討議しつづけてゆくことが、まずその準備的工作であらうと思われる。討議さるべき議題の設定については、各地理学会が今までの研究報告を類別し、その主なるものの研究内容を検討して、それらのもつ意義と、その将来性を価値づけると共に、市民生活に寄与すべき新しい議題の設定と討議の遂行とが企画さるべきではないかと考えられる。この点については、広く諸科学会の大会などで取上げられている新しい行き方に学ぶべきではあるまいか。人文地理学の今後の在り方について、地理学者自身が生み出すことは当然の責務ではあるが、姉妹科学でありながら、数歩前進している歴史学者や、農学者その他の社会科学者の要望を虚心坦懐に聞くべきではあるまいか。切に各地理学会幹部の熟慮断行を切望せざるを得ないのである。

方法論とその実践に対して、ここに小さい体験を要約するならば、明治時代には『農業本論』に地理学の研究方法を採求し、「郷土会」にその実践を意図し、大正時代には、「聚落地理学」の研究方法を、『都市と村落』（大正3年9月刊）と『帝都と近郊』（大正7年10月刊）に示し、また「地理教育」に対しては、『我が国土』（大正2年11月刊）を公にして、当時行われている地誌的方法に対する私見を明かにした。その後、「郷土地理」についても、幾多の調査研究の方法を提唱した。

惟ふに、人文地理学的研究には、人文地理学的事実の蒐集整理をなすにも、またその修正や造成をなすにも、それらを総合する思想的根拠の把握とそれに基いた臨地調査によつての実証が並びに行われなければならない。即ち智識と思想の人間像の出現を指標としなければならないことを感じつつある。このように考えて来ると、人文地理学の専攻者には、専門的技術以上に、それを豊かに培養育成する思想（土壌）が問題になる。フランスのソルボンヌ大学においては、人文地理学専攻の学徒が、まず文科的教養を積むような仕組になつてゐることについて、田中阿歌麿博士は、晩年に至るまで、その用意深い組織に共鳴しておられたのであつたが、日本の再建に役立つべき人文地理学の役割については、国家的な問題として新に考えられるべきことではなからうか。

Ⅲ. 思想的根拠

私事に亘るが、私は、小学校時代から祖父が忘年の友とよんでいた郷塾主神沢繁先生の許に出入し、中学に入る前、一年間入塾したために、塾主の民主的な学風や『先哲叢談』の愛讀によつて徳川時代の儒者の生活に馴染み、殊に上京（明治30年）後、内藤虎次郎先生（当時朝日新聞記者）の『近世文学史論』によつてそれを深め、また狩野良知、同享吉父子両先生の御宅に寄寓していたことが、一層思想的な関心を深めるようになった。従つて、高師で地理歴史専修科に入つていても、徳川時代史を専攻するつもりで

あつた。しかるに、早中の地理教授の担当がついに地理学の専攻を余儀なくさした。しかし、狩野・新渡戸両先生への近昵が、地理に志向しながらも常に思想への志向を続ける機縁となつた。また高師在学時代には社会学に触れ、早中を通じては、東京専門学校(早稲田大学の前身)の自由思想を味得したことなど、何れも人文地理思想の教養に役立つた。

地理学に志すと共に、その核心ともいふべき村落に深い関心を抱いたのは、当時の地理学の教科書でも参考書でもまた論文でも、自然現象と人文現象の羅列に終始していたので、寧ろ火山の裾野では特殊な農業組織を、砂浜の漁村や洪積層の農村ではそれぞれの経済生活を見きほめ、それによつて地理学的精神に触れたいためであつた。(『我が国土』自序)気候の影響と農作物の関係、産業の歴史的発達、交通の史的変遷、民居の疎密、人口の移動、京都・大阪・東京の特色、北海道の特徴などを記述の重点としたのも、当時の平板な地誌的記載に満足しないためであつた。

以上述べたような地理教育に対する私の主張は、更に人文地理学の方法論に展開した。即ち「都市と村落」が、既に行政家や経済学者の間に研究論議されておるのに拘はらず、最も関係深い地理学界・史学界で閑却しておるのを遺憾とし、『都市と村落』(大正3年9月刊)の小論に、石橋五郎・大類伸・今井登志喜・その他の諸氏を始め、海外ではこの種の研究が行われていることを明かにするために、フランスのガロア教授やドイツのホルツマンなどの論稿を訳載した。同志のものには、石橋氏の欧米における人文地理学とその研究方法・武庫附近聚落の変遷、大類氏の都市の変遷、今井氏の中古末期のドイツ都市の発達、鳥居龍蔵氏の蒙古の村落など専門家の研究を始め、海外論叢には、ガロアの都市の膨脹とその集域、メッキングのベナレス市の寺院区、アルボの山民の漂泊生活などは、東京地学協会の図書館に出入して、フランスやドイツの雑誌を丹念に吟味して、都市や村落の研究方法を明かにする好文献を抽出訳載したのであつた。当時、この種の文献は絶無であつたが、間もなく開かれた全国の地歴教師の講習会

員の中に一人の購讀者をも見出し得なかつたことは、聚落地理研究に対する関心の程度を卜することが出来る。しかし、程なく、ドイツ留学から帰朝した大関久五郎君(高師教授)がこの刊行を喜んだことと、また 1931年 9 月にパリーで開かれた国際地理学会会議の際に、ブランヒワイグにバンゼ氏を訪れ、談偶、ホルツマンの書いた「地理学の革命とバンゼ氏」を訳載したことを話したら、大変喜ばれ、日帰りのつもりで訪れたのに、一夜を同氏の閑居に語り明かすことを得たのは、『都市と村落』を出した御蔭であつたと苦笑している。

大正の中期に、毎年 1,2 週間、京都に赴いたのは、小川博士が『和名抄』の郷土地理学的考証に熱中しておられたので、村落研究において示唆を受けるためであつたが、史学科の教授の中に、内藤博士や、旧知(東京専門学校出身)の内田博士からも、隔意ない談話によつて啓発された。京都の自然や風物も、人文地理学的な土壌としてはこの上なき環境であつた。のみならず妙心寺の専門道場に竹馬の友平元徳宗老師がおられたので、大学の諸教授から専門的な示唆を受けた後、半日、平元老師と、東山や嵐山を逍遙することも私の京都での日課の一つになつていた。

その後、私は、ロンドンのル・プレーハウスから出ている『社会学評論』を早稲田大学図書館で見付け、その中にフランスの社会学者ル・プレーの思想に共鳴する一団の人たちが、その思想を根拠とした地域調査を行ひ、それを通じて「市民生活」の改善にまで進展していることを読んで、そこに地理学と社会科学との関聯に基く重要な人文地理思想を見出し、これを「ルプレーの思想と地域研究」(『郷土地理研究』参照)と題して、イギリスの継承者ゲデスにも言及したのであつた。生物学から社会学に進んだゲデスは、地理学の価値を「諸科学の母」と認め、個別科学としてよりも総合科学としての任務を強調し、その思想から生れた「地域調査運動」Regional survey movement の源を遠く文芸復興にありとした。これらの地域学者の考えは進んでいて、「諸科学の本質的総合は、地球表面の同一地域にお

ける協同研究をなす時ほど、明瞭にあらわれる時はない」とする。しかしこのような思想は、まだ日本の地理学界には受け容れられ難い。

しかるに、このごろ、20世紀の思想家だといはれる米人ルイス・マンフォードはその昔『人間の条件』(1911年7月刊)において、ゲデスの伝記を著はしたほどゲデスの思想に共鳴し、「思想を行動に、行動を生に、生を感覚や感情や体験の最高の表示のすべてに結びつけた」とし、また「彼の思想からは、直接に見聞した探査と地方的な研究とによる歴史学と地理学との再活躍が到来した。……ゲデスの生の哲学では、機械組織はけつして生の主としてではなく、生の召使としての確固たる地位をもつていた。……」と評価し、更に言葉を下段のようにすすめている――。

「市民として、自分の協同体と自己のいる地方のなかに生を維持し、生を培かいつつ、また世界中の他の市民と協働しつつ、ゲデスは専門家が共同な見解、共同な目的、共通な計画のために立ち上ることを信じていた。このような考え方は、国家の権限と市民の自由性と、また全国家の要求を地方的利益の均衡を意図する地域主義とも一致する。」

ゲデスの思想を語つて詳かではないが、地理学の学間的価値は、この辺にまで進まなければならないと思はれる。

昭和20年4月12日、戦災によつて丸焼になつたが、不思議にも、ゲデスの『来るべき国政』(1919年刊)とフエヤグリの『人文地理学—世界(1920年刊)』を灰燼の中から拾ひ得た。フ氏の人文地理は単なる地理的事実を教ゆるよりも、広い視野から「他の人民の生活を思いやりをもつて理解しようとする近代民主主義のアイデアに立つたもの」であり、ゲ氏の著と共に第1次大戦直後のイギリスの心構を表現しているものであるから、今日の日本の人文地理学徒の思想を啓蒙するに足れる。フランスの人文地理学がブラーシュによつて統一されたのも敗戦後の国民的自覚の現われの一であるといわれている。

今日、私たちが、人文地理学の方法論とその実践を身につける方途を案出するには、一方に世界的な人文地理学論を味読しながら、常に日本の人文地理学の志向を同志と共に展開することを努むるにある。

English Abstracts

My Stepping for Human Geography

—A Method of the Study of Geography and the Way
to carry it in Practice—

TSUBIN ODAUCHI

① Though geographical research in eighteen-nineties were only simple topographies, I was excessively suggested by Professor Nitobe's "Nōgyō Honron," the principle of Agriculture.

② In August of 1910, by the suggestion of Satoru Nakame, I organized the Society of Home Land with Inazō Nitobe, Kunio Yanagida and the others. The society carried the co-operation survey in August of 1917 at uchigō village of Kanagawa prefecture, but such a method of study had not been adopted for the Human geography.

③ Geography should be pursued as a branch of cultural science as well as sociology.

④ I, for my part, owe my basic Knowledge of human geography to Shigeru Kamizawa, Torajiro Naito and liberalists of Waseda Univ. And I believe the theories of Banse and the others must be instructive to the Japanese students of geography, as I have been so.

Towns in Kinki District

KENJIRO FUJIOKA

Town is a transitory fast shifting between the village and the city. Therefore we can not determine it city or village in point of area, occupation, population and culture.

As regard to its origin and construction, there are three kinds of town: